

ごあいさつ

人生と野草に込めた想い

～ひっそりと咲き、しかし力強く生きる～

《 令和8年3月17日（火） ～ 7月12日（日） 》

三橋節子が好んで描いたのは、名も知れない野草ばかりでした。

自然に対する繊細な感受性をもつ彼女は、多くの人々が美しいと感じる花には目を留めず、見向きもされないような野草にこそ美を見だし、専ら野草を描き続けました。

愛する二人の子どもたちに「くさまお」や「なすな」という名前をつけるほど、彼女は野草を愛してやみませんでした。

「野草の画家 三橋節子」

なぜ彼女は、野草をこれほどまでに愛したのでしょうか。

哲学者の梅原猛氏は、

「父・三橋時雄氏の影響もあろうが、それ以上に、彼女が生来的にもち、環境によって培われた、生きとし生けるものを深く愛する心による。この心がなかったら、あの晩年のすばらしい絵は描けなかったであろう」

と記しています。

大好きだったノリウツギなど、二十二種類もの草花を一面に描いた《花折峠》は、死の半年前に制作されました。

彼女自身、逃れることのできない病からの回復を願い、奇跡への祈りを託した作品であり、野草の画家として出発した三橋節子の集大成ともいえる作品です。

今回の企画展では、「野草の画家」と称された彼女が、喜びや悲しみ、生命の輝きといった想いを込めて描いた「野草」をテーマに、作品を展示しました。

常設コーナーでは、インドや東南アジアの異文化を描いた作品、「近江むかし話」を題材とした作品もあわせてご覧いただけます。

三橋節子の世界観をご堪能いただけましたら幸いです。

三橋節子美術館